

令和2年度 第1回 横浜市新たな劇場整備検討委員会 管理運営検討部会	
日時	令和2年6月17日(水)14:00～16:00
開催場所	横浜市研修センター401・402
出席者 (敬称略) (5名)	高橋 進 部会長(株式会社日本総合研究所チエマン・エメリタス) 天沼 ひかる 委員(横須賀芸術劇場 副館長 公益財団法人横須賀芸術文化財団 業務部長) 内田 裕子 委員(経済ジャーナリスト、ハーベイロード・ジャパン副代表) 藤野 一夫 委員(神戸大学大学院国際文化学術研究科教授) 山中 隆 委員(滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール館長)
欠席者 (敬称略) (0名)	
開催形態	公開(傍聴5名/報道4社)
議題	(1)新たな劇場整備の検討 (2)その他
資料	資料1:委員会名簿 資料2:席次表 資料3:令和2年度第1回横浜市新たな劇場整備検討委員会 管理運営検討部会資料 資料4:令和2年度第1回横浜市新たな劇場整備検討委員会 委員からの意見(会議開催記録より)

議事内容

1 新たな劇場整備の検討

【事務局】

- 本会の部会長でございますが、横浜市新たな劇場整備検討委員会運営要綱第2条第3項に、「部会長は、横浜市新たな劇場整備検討委員会委員長の指名によって定めること」となっております。これにより、高橋委員へのご指名がありましたので、高橋委員に部会長をお願いしたいと思っております。高橋部会長、よろしければご挨拶を一言お願い申し上げます。

【高橋部会長】

- 部会長にご指名いただきました高橋でございます。どうぞよろしく願いいたします。
第1回横浜市新たな劇場整備検討委員会管理運営検討部会の開催にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。
- 私、昨年1年間、劇場整備検討委員会の委員長として、委員長を務めさせていただきました。
私はもともとエコノミストで、こういうテーマは畑違いなのですが、委員の皆様と劇場整備について、芸術振興という視点だけではなくて、まちの活性化、経済の振興、人材育成、社会的包摂等々、様々な視点から1年間議論してきました。

- ・ 今後につきましては、事業化判断に向けてハード、ソフトを含め、しっかりと議論してまいりたいと思いますが、同時に、どういう内容になるにせよ、この会議を通じて私どもは、市民の皆様きちんとして説明責任を果たしていくということも必要なんだと思います。そういう点も十分留意しながら進めてまいりたいと思います。
- ・ 管理運営検討部会は、昨年12月の横浜市新たな劇場整備検討委員会による第1次提言を踏まえて、今年度、事業化を判断するために必要な仕組として、管理運営の内容などを検討するために設置されました。専門的知見を有する方々が委員に就任されていますので、皆様にはより深い視点で自由かつ達意に議論をしていただきたいと思います。部会長として委員の皆様には活発にご議論いただけるよう注力したいと思いますので、委員の皆様も是非ともご協力をお願いしたいと思います。

以上、簡単ではございますが、部会長としての挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

【事務局】

- ・ 高橋部会長、ありがとうございました。この後、部会長におかれましては、まず初めに委員会運営要綱第4条第4項及び第10条第4項の規定に基づきまして、部会長の職務を代理する委員をご指名いただきますようお願いいたします。それでは、これより先は委員会運営要綱第4条第3項及び第10条第4項の規定により、部会長に議長として進行をお願いしたいと思います。それでは、高橋部会長、よろしくようお願いいたします。

【高橋部会長】

- ・ それではまず、部会長代理の指名をさせていただければと思います。昨年度より横浜市新たな劇場整備検討委員会の委員をお務めいただいております藤野委員をお願いしたいと思います。よろしくようお願いいたします。

【藤野委員】

(了解)

【高橋部会長】

- ・ それでは、議題に従って進めていきたいと思います。ご質問、ご意見については後ほどまとめてお時間を設けます。各委員からご発言をいただく場合は挙手いただき、お近くにありますマイクを使って

ご発言いただくようお願いいたします。それでは、まず資料に沿って事務局から説明をお願いいたします。

【事務局】

(資料3の説明)

【高橋部会長】

- これから皆様のご意見、ご質問等をお伺いしたいと思いますが、便宜的に第1章と第2章、ページ数でいうと9ページまでについてのご意見、ご質問と、3章は飛ばして4章の論点について別途議論したいと思います。前半と後半に分けてご議論いただいて、最後また何かご質問があればということでご意見いただきたいと思います。ということで、まず第1章、第2章までのところでご意見、ご質問がありましたらお願いします。どなたからでも結構でございます。お手を挙げていただければ、指名させていただきますので、よろしくお願いします。

【藤野委員】

- 昨年も色々な場でお話しをさせていただきました。私の専門は文化政策という、あまり日本では耳にすることのない分野なのですが、簡単に説明すると、人間とはどうあるべきか、世界はどうあるべきか、という哲学的な問題と関係してくる分野だと思えます。しかしそれは実際には芸術・文化を扱う訳ですから、芸術・文化を通して、どうやって人間の幸せを作っていくか、あるいは、社会の仕組みをより良いものにしていくか、世界の環境をより良いものにしていくかということに取り組む分野です。私はこういう公共政策の分野は、増々これから日本でも大切になってくると思えます。
- 特にこの「with コロナ」と言われる時代に入り、舞台芸術の必要性というのは増々重要になってきている。私の話の大前提というか、核心なんですけれども、今回の横浜の新しい劇場というのも是非実現していただきたいし、日本全体の自治体の状況を見ても、横浜がラストチャンスだろうというぐらいに思っています。ですから、応援団の1人として力を尽くしていきたいと思っています。舞台芸術のファン、愛好家というのは確かにおります。バレエファンとかクラシック音楽ファン、オペラファン、演劇ファンなどですが、新たな劇場は、そうした愛好家のために必要なだけではない、ということをかなり丁寧に説明していく必要があるのだろうなと思っています。つまり、全ての人々にとって、特に私達が今関わろうとしているパフォーマンスアーツ、舞台芸術というのは必

要不可欠、なくてはならないものなんだ。つまり、水や空気や食料と同じぐらい重要なものなのだということを説明していく必要があると思っています。

- そういう観点から考えると、いわゆる基本方針に関わる1番目から4番目が重要だと思います。「舞台芸術は」で始まるところで、現在のグローバルなレベルの舞台芸術の意義が書かれています。そのグローバルな芸術・文化の意義と比べると、日本はかなり脆弱であると。特に民間は頑張ってきたけれど、公的な支援が脆弱なことが、今回のコロナの問題でも明らかになったところで、す。
- 3番目のところで、正に今の現実の状況変化というのが出てきて、及び腰、縮小傾向というのが残念ながら出てきている。それを受けて4番目のところで、こうした厳しい状況、環境においても、舞台芸術の活性化は私達の日々の暮らし、経済を支えるためには必須であり、新たな劇場整備はそのために重要な役割を果たさなければならないとあります。これはその通りなんです、こういった厳しい状況でありつつ、なぜ私たちの日々の暮らし・経済を支えるために新しい劇場を作る必要があるのかという理由付け、根拠付けのところをしっかりと補強していく必要があると思っています。
- つまり、なぜ新たな劇場が必要不可欠であるのかということです。なぜ横浜から創造発信していくのか。そのことの基本理念というのは多分、英語だと「フィロソフィー」ということになるのですが、そのフィロソフィー、哲学をきっちり作っていくということがとても重要で、それから各論に入っていくのだと思います。日本国内の環境が変化する、あるいは、社会・経済状況が今のように変化したときでも、レジリエンス、つまり立ち直る力をどうやって支えていくか。環境が変化したときのレジリエンス、その支えというのが肝だと思うんです。グラグラしてはいけない。やはりここが重要というところに立ち返る、その支えというのがフィロソフィーだと思います。
- 私はずっとドイツを見ながら、日本がどうあるべきかということを考えてきました。色々エピソードとして思い返すことがあるのですが、少し古いところで言うと、ドイツ統一から今年、30年が経ちました。統一直後の91年当時、ヴァイツゼッカーという大統領がおりました。非常に高潔な人物、本当に劇場が好きで、劇場に行くとき後ろにいたり、隣にいたり、ホワイエで直面したりということもよくありました。しょっちゅう劇場、コンサートにいらしてる方だったんですね。そのヴァイツゼッカー元大統領が、91年のドイツの統一危機、統一のために財政難になった際、どういうことをおっしゃったかというのが、最近またリバイバルして、ドイツで言われています。
- メルケル首相の言葉とかグリュッター文化大臣のことはよく耳にしますが、遡ると、今から30年前にヴァイツゼッカー元大統領が言ったことが凄く重要です。どういうことを言っているかというと、「文化は確かに高く付きます。しかし、文化は、私達がそれを楽しむゆとりがあったり、

あるいは、ゆとりがない時は取り消しても良いような贅沢品ではない。飾りものではない。」と言った訳ですね。そうではなくて私たちの内面に本来備わっている生き抜く力、ドイツ語で「ユーバーレーベン」というのは、サバイバルする力を確実なものにしてくれる精神的な基盤なのだと、ヴァイツェッカー元大統領は言った訳です。

- つまり、多くの人々が、あるいは誰もがこのような文化観、芸術観を持つ、認識を持つこと、そして市民的な合意が得られるかどうかということが重要になってくると思います。もちろん愛好家の人達は、オペラとかバレエ専門の世界レベルの劇場があつて欲しいと思う訳です。だけど、そういう根本経験というか、美的な経験を持っていない人からすれば、白けてしまう状況が残念ながらあると思います。だから、誰にとっても劇場は必要であると、あるいはオペラやクラシック音楽が我々には必要だということが理解して貰えるような仕掛けをどう作っていくのかということが非常に重要になってくると思います。
- 最近で言うと 2015 年にヨーロッパ難民危機というのがありました。シリアからドイツに 100 万人以上の難民が、本当にサバイバルで渡ってくる訳です。電車で何も持っていない、パスポートも何も無い、お金も無い人達はその駅に着いた時に、ドイツ人はどういう迎え方をしたのでしょうか。現場を見てびっくりしたんですけど、劇場関係者が駅に着いた難民を「自分の劇場に來い」と言う訳です。「ウェルカム レフュジー」と、プラカードをかかげて「難民歓迎」と言って、劇場関係者が迎え入れたのです。自分たちは公演をやっているのに、です。
- 例えばハンブルグはドイツの終着駅です。駅前にドイツ劇場という公共劇場があります。そこで公演をやりつつ、難民が駅に着いたら劇場に連れて行って「ここで休みなさい。ここで泊まりなさい。」と、マットレスを用意する訳です。まず楽屋に用意するんだけど、段々足りなくなってくるとホワイエに簡易ベッドを作って「ここで休みなさい」。公演をやりつつスタッフや役者がそうやってレフュジーを歓迎するというをやっています。
- それから、ドレスデンというのはネオナチで有名になってしまいましたが、実は市民社会のレベルではそんなことはない。その当時ドレスデンに行くと、美術館とか博物館、ホワイエやカフェで市民達がボランティアで難民達に手取り足取りドイツ語を教えるということをコツコツとやっている場面を見ました。
つまり、報道されているフェイクと、実際の市民社会における芸術・文化を享受することを通じて難民を受け入れようという気持ちがかき起きている人との間に、実は凄い開きがあるということ、私は身をもって体験しました。
- もう少しお話しをすると、旧東ドイツのベルリンの中心部にマキシム・ゴーリキー劇場という老舗の劇場があります。ここは官庁街なんです。近くに政府機関とか役所が沢山ある。その劇場の総

支配人はトルコ系の移民の女性なのです。そして、難民が入ってくる。難民の中にも舞台経験がある人がいる訳ですから、難民の劇団を作って難民を舞台に乗せました。そうすると、政府関係者とか企業の人とか行政の人とか、もちろん一般市民もそうですけれども、その劇場に毎日のように通う訳ですね。難民の状況がどういうものであるのか、あるいは、その本国はどのような状況なのかということを、舞台を通じて生身で理解できる訳です。そしてもちろん、色んな想像力が働く訳です。政府の関係者等が日常的にその世界の状況、あるいは、自分達と違う状況に置かれている人達のことを思いを寄せるような場が、舞台芸術を通じてできている。そういう劇場関係者の動きがあって、ドイツの政治家達は先のヴァイツゼッカー元大統領のような考え方を、国民に述べるができるようになるわけです。

- こういった表現の自由があり、他者に対しての寛容の精神というのが育まれる。これこそが正に芸術、とくに舞台芸術の本質的な効用でしょう。これこそが、これからのグローバル化にとって一番重要なことじゃないかと、ずっとドイツと付き合いながら感じてきました。
- 残念ながら日本の場合、文化政策がそういう観点から語られることはないのです。これはグローバルな文化政策のレベルから言うと、かなり日本は違う、日本はドメスティックな位置にあるのだらうと思います。そういった形で基本理念ですね、フィロソフィーのところをもう少し補強をして、どんな社会状況になってもまた立ち戻れるようなレジリエンスの精神的な支えをつくる、という観点から、新たな劇場を構想する必要があると思います。

【天沼委員】

- 私は、横須賀に劇場ができてちょうど25年過ぎまして、まちの活性化という意味で建てられた劇場を運営してまいりました財団の者になります。
- まず先生の言っていた精神論以外のところで、本当に現実的な問題として、やはり劇場にいらっしやらない方というのがこの世の中において、例えばスポーツが大好きな人もいて、劇場に一切足を運んで来ない方もいますけど、でも、その方にはスタジアムがあってサッカー場があってというふうにある訳ですから、やっぱり劇場というのは、劇場で行われることが好きな人、これはオペラとか全く関係なく、そういったものが好きな人にとっての場所というふうに思います。

必要度という意味ではその人達と同じように、劇場がまちにあるべきだと思いますし、ただ、その劇場の位置付けというのが、まちの大きさですとか地域性によって凄く違う。横須賀芸術劇場は、人口40万を切りましたけど、そういった三浦半島の端にあるところですから、本当に公民館的な利用から大きな誘致とかこなしているけれども、建てる時に大きなものでもできるようにということで、オペラハウスの形式を選んだ訳です。実は、新国立劇場が建つときと同じでして、舞台の

仕様が非常に当時としてはもの凄く贅沢な造りになっておりまして、そのおかげで今、20何年経って色々修繕の問題とか抱えていますけれども、ある程度のパフォーマンスは全て受け入れることができるという状態になっております。

- もちろん財政的な面とか、そういったところが発信的な芸術を打ち出していくような立場ではないですけれども、私達のような細々とした劇場でも、自主制作でオペラとか色々なものを作品として出しておりますけれども、そこにあるのは何もない所にできて、色々な方がそこを使ってくれることによって、その場所それぞれに価値がある中で、色んなものが上演されたりとか、学校の卒業式があったりとかで、自分達の劇場がまちにとってどういうものなのかというのは、それぞれに多分カテゴリーがあって良いんですけど、最終的な「我がまちの劇場」という思いがあれば、もの凄く重要な場所になるんだと思っていて、ただ、横浜市の場合は、周辺に民間のアリーナですとか、それぞれ用途別に全ての場所がある意味整っているという場所になると思いますので、そういった意味でどういう方針で運営するかというのは、ある意味難しいところではあると思います。
- オペラ、バレエというと、舞台芸術としての規模感が凄く大きい。小さくも出来るんですが、総合芸術と言われるだけにそれなりのものではあると思います。それを選ぶということは、やはり中枢としては凄く「正しい」という言い方はおかしいかもしれないですけど、そうだと思いますけれど、そこで今なのでオペラ、バレエというクラシック的な響きもあってオーソドックスというものもあると思うのですが、ジャンルを超えて色んなパフォーマンスが生まれてきているので、是非そういう新しいものを積極的に発信していくような場所として、これから色んな理想的なことが叶うであろう、横浜の劇場の中にそういう一つのポリシーがあっても良いのではないかと思います。世の中のパフォーマンスの楽しみ方というのが今、今回コロナのこともあって、ライブ配信でも、ただ映像を配信するのではなく、色々コンピューターでもできますよね。

そういうものがかかってきて、見せ物としては凄く色んなジャンルが出てきている中で、一つ生で見られる劇場としてどういうことなのか、今のテクノロジーを考えて、先に色んな可能性があるのかなというのを、劇場を愛する1人として、もの凄く期待するところでありまして、皆さんに理解して欲しいのは、必要な人にとっては必要ですし、あとはどうやって関わるかというのは考えによって色々変わるので、皆さんに愛される場所になるためには、どうしたらいいかというのを、決めていければ良いのかなと。私は逆に横浜の後ろにいる横須賀市から見ている形ですから、かなりユニークなことをやらないと横須賀には人は来てもらえない。でも、そのユニークなことが何とか出来ていますし、ドイツの財団とオペラコンクールももう20年やっていますし、色んなつながりで何でも、やろうと思えばできるという部分がありますので、是非本当に、立地としても凄く恵まれているところですし、皆さんがやりたいと思っている理想を叶えるのと、あとやっぱり市民の方に

愛されるためには、何なのかということを見つけていければ良いかなと思います。ありき論みたいになって申し訳ないですけど、実際、運営していて本当にまちの中に劇場が一つある・なしで全く違いますから。人が来ることで経済も回りますし、ましてや国際交流というものもできてきますので。劇場って、本当に色んなものを生む場所であるということも分かっていたきたいと思います。

【山中委員】

- ・ 読ませていただいて、本当によくできているというか、素晴らしいと思います。横浜というところは、凄いポテンシャルのあるところなので、我々のびわ湖ホール、滋賀県と全然その点が違うので。
- ・ 制作費が結構高くつくんじゃないかと書かれているんですけど、恐らく最高水準の劇場ができれば、海外からのオペラ招聘とかバレエの招聘は、ほとんどプロモーターがリスクを取って全てやりたいと言ってくる感じじゃないかなと思います。今、新国立劇場なんかは、貸館とか海外の例えばオペラ座やポリショイをやっていないので、むしろ凄く新しい設備の整った劇場ができれば、是非やりたいと言ってくると思ひまして。恐らくそれにはそんなにお金はかからないんじゃないかなと。うちなんかですと、非常に滋賀県まで行くと大変なんですけれど、うちですらオペラに関しては「たまには買ってくれよ」という話もありますけど、共催ということで貸館料を取らないということで、今年だったらバーリ歌劇場がやって来てくれる状況になってます。チケット代はペイできるようにかなり高いですけども、高いチケットの部分と、アンダー30、アンダー24とか、若い方向けの部分があって、オペラでも4,000円～5,000円ぐらいで楽しめるような席を設けたりとかです、そういう工夫を海外から来るオペラ団体と話をすれば、設定できると思います。だから、海外から一流のものがやってくる、呼ぶことに関して、それほどお金がかかるとは思わないんですけど、ただ、自主制作をしますとですね、うちでもオペラの自主制作をやっていますけれども、その金額は、海外から招聘するオペラの少なくとも倍はかかります。オペラ1本作るのに1億円は最低でも用意してください。ただ、それが高いと思うかどうかはですね、自主制作をすることによって、職員、技術者とか、舞台技術部というのがうちの中にもありますけれども、彼らの技量が飛躍的に上がっていきます。自主制作をすることによって。
- ・ 一応半分アカデミーのような感じですけども、びわ湖ホール声楽アンサンブルというオペラの歌い手を16人抱えています、彼らの技量もどんどんアップするし、自主制作のオペラですから、彼らが大ホールのオペラだと合唱部分の端役ですけども、中ホールのオペラだと彼らを主役にして、自主制作のオペラを年間4～5本作るんですけど、すぐに舞台上げてもらえるということ

で、オーディションでやっているんですけど、全国から優れたオペラ歌手を目指す方々が受験してきます。そういうレベルが自主制作をすることでどんどん上がっていきます。そういう力量を備えたものをいかに県民の皆さんに還元していくかというのを考えてまして、やっぱり子供達だと思うんですよ。小学生を年間大体1万人ぐらいホールへ呼びまして、京都市交響楽団のオーケストラとうちの声楽アンサンブルのメンバーが子供たちと一緒に歌うという、1時間もののコンサート作っているんですけど、それに子供達を呼んだりとか、小中学校の巡回公演、これはオペラをやるときもありますし、合唱を聴かせるときもあります。それから、男女一組とピアニスト3人で、いわゆる音楽の授業を展開しています。そういうこともやっていますが、自主制作によって演者のレベルが凄く上がっている。そして舞台技術者が、普通の体育館を劇場に変えるような照明、音響、舞台装置、そういったレベルも上がってきます。

- そういうことで決して無駄ではないというのを、横浜市が市民の皆さんにどう理解して頂くかというのが重要であって、制作費は確かに高価で、一部の好きな方しか見られないかもしれないけれども、それが自分の子供達の学校に来てくれて、素晴らしいものを教えてくれるとか、そういうことになれば、決して問題ない、そう高いものじゃないと思ってくださると思います。

- 実は、びわ湖ホールでも10年ぐらい前にちょっと事件がありまして、実は、びわ湖ホールをしばらく休館にして、福祉予算に回したらどうかというような話が。そのときは、全国のオペラファンの署名とかがあって落ち着いたんですけど、そこからちょっと方針をうちの財団は変えまして、音楽祭をやり出したり、今申し上げたような子供達を呼んでの音楽会だとか巡回公演だとか、そういうことに凄く力を入れ出しました。

そしてそれをアピールしなければならぬと思って、県会議員の皆さんと会うときに、どの小学校が何日にというリストを作り、地元の小学生が来的时候に是非一緒にご覧頂きたいと案内しています。そういうことをやり出してから全然、批判がなくなりました。

- 今回、リング4部作の「神々のたそがれ」を3月にYouTubeで配信したもんだから、随分話題になっちゃって、制作費が1億6,000万円かかったので、まずいかなと思ったんですけど、1件の苦情の電話もありませんでした。それが高いというふうには県民の皆さんは誰も思わなかったということで。これは20年やってきて誇れることだと思います。うちですらそういうことですから、横浜というポテンシャルがあって、ある程度制作費が高価なものになっても、それを上回る波及効果というか、何かそういうものがあるような気がしますけど。
- ですから、びわ湖ホールが声楽アンサンブルを抱えているように、是非アカデミーのようなものを抱えて欲しいと思います。それはバレエであっても何であっても良いんですけど。そういうアカデミーというか、うちはオペラ歌手が16人いますけれども、それがやはり凄い戦力なんですね。な

おかつ、その卒業生がたまってくるものですから、今、60人以上いますね。結構県内に住んでいる方が多いので、色んな所で合唱の指導をやったりとか、企業の何周年記念ということで歌いに行ったり。BS朝日なんかで土曜日に収録してもらったものが流れたりしていますけど、是非、そういうアカデミーを作ってください。

- それから、横浜のポテンシャルについて述べますと、うちのホームページ、アクセス数をカウントしているのですが、一番多いのは大阪と東京がいつも競っていますけど、その次が地元滋賀県。4番目に神奈川県です。5番目が京都府ですね。多分オペラに興味があって、そのぐらいアクセスされていると思うけど、凄くそういう関心がある方が多いということをご紹介させていただきたいと思います。
- ちょっと気になったことで言うと、運営費以外で意外とお金がかかるというか、作った後の修繕ですよね。これがどうも国とか県とか市は減価償却という考え方がないものだから、作ったら作ったで次に大規模改修するときまで放ったらかしなもんだから凄く予算取りにその時に苦労して、ということがあるんです。本当は民間のアパートやマンションだと修繕積立金がありますよね。そういうものを積んでおいていただいて、ちょっとおかしくなったときにすぐに修理できるようにししてもらわないと、運営する側にとっては凄くそれがハラハラドキドキする部分ですし、すぐに手当さえすれば、それほど大規模改修するときにお金が少なくて済むということもあると思います。あと、我々の財団で言えば、人件費がね、最初30代ぐらいの優秀な方をピックアップしたり、ホールができる前から県職員として採用したりとかしていたんですけど、彼らが今、五十二、三、四、五と上がっていきますよね。で、人件費はどんどん上がっていきます。

その辺のことを検討というか考えてくれてないので、どうしても事業費を、修繕とか人件費にどんどん毎年取られていくというような状況にあります。だから、全体の運営費か何かを考えられると思うんだけど、その要素も加えておかないと。運営についても、直営されるのか財団がやるのか分かりませんが、それを考えておかないと、「こんなはずじゃなかった」ということになるんじゃないかというのが、運営していて思うところです。

【内田委員】

- 私は経済ジャーナリストという肩書で、全てにおいてこういう施設は経営、どうサステナビリティを持って管理するかが問われてくるので、そういう役割期待かなということだと思うんですけど、それと同時に私は大学で芸術学科で演劇を専攻して勉強してきたということと、大学以前の頃から舞台芸術に親しんできたという意味では、見方によっては舞台ファンというのも実は長いかなと思うのですが、そのような立場で参加させていただいているんですね。

- 最近、私は横浜の本を書きまして、『横浜イノベーション』という本を現場取材をしながら書かせていただきました。その中で横浜の強み、弱みというものが浮彫りになってきたということなんですけれども、先ほど部会長もおっしゃった、市民に対して説明責任があるのだということが本当に大切に、しっかりと情報を開示していくとか、説得をしていくとか、納得・共感を得ていくということがこの劇場建設においては非常に重要になってくるのかなと思っております。
- そこで、なぜ横浜にこれだけ高次の劇場が必要なのかということですが、これには私なりの答えがありまして、横浜というものを細かく調べていったときにですね、実は凄く歴史が浅い。良い意味でもありますけれど、他の都市に比べて浅いということなんです。「では、横浜とは何なんですか」ということを、横浜のあらゆる名士の方にインタビューをして聞いて回ったんですね。そうすると意外と「横浜ってこうなんだよ」というピシャっといった答えが無かったんですよ。何となく皆さんそれぞれの横浜像というものがあって、でも、その言葉が全てまちまちで、私も取材をしながら、「一体、横浜の実体というのは何なんだろうかと、そんなことを非常に迷いながら本を書いたんですね。結論としては、横浜というのはいと実体が無いと、軸が無いと。むしろ、本当にこれだけ綺麗なまちを、行政の方たちの尽力もあって綺麗に建付けとしてまちを整備してここまで持ってきたということ。
- では、ここから何が足りないかという、やはり中身ですよ。軸になるものが足りないと思っていて、横浜の本当のここからの魂になるものは何なんだろうかと考えていったときに、ポッと出てきたのが I R であるとかそういうことがあって。

でも、中々この I R というのは派手なイベントになるんですけど、じゃあ共感を市民全体で得られるかという、中々ハードルが高い、難しいというような状況も見え隠れする訳ですね。その中で、街を街たらしめるものは何かという、やっぱり市民なんですよ。どんな立派な建物を作ろうと、どう素晴らしい興行を持ってこようと、そこにある、そこにいる人々というものが最もプライオリティの高い価値になってくると思うんですね。
- じゃあその良き市民をつくる、横浜というのはい市民力なんだと考えていくと、良き市民を作っていく。それがですねサステナビリティ、本当の横浜の力っていうもの、ブランドっていうものになっていくと思うんですけど、じゃあ、その横浜の文化、土壌というものをどうやって作っていくかということになると思うんですね。私も企業の取材を散々してきて、色々な企業の生産方式であるとか、様々な経営方法であるとか、そういうものを「良いな」というところから自分の会社に持ってきて運営させようと思っても、できないんですよ。どうしてかという、そこには文化という社風、土壌というものがあってはじめて、そういうシステムみたいなものを載せてきたときに上手く回るというようなことがある訳です。

- じゃあ、横浜市民というものを育成していく、作り上げていくというときに今、横浜がアートに力を入れているというのは、非常に私は「良いな」と思って共感をした訳です。自分達の市の軸となるものを若い街ですからね。アートにしていくというのは、他の市ではなかなか無い。その中で「アートなんだ」という視点は非常に良いなと思っていて。時代が変わってきて、今、日本人に足りないものは何なのかというときの教育の論点でもありますけれども、リベラルアーツなんだと。これまでは受験勉強で記憶して、詰め込みで答えが出るということで偏差値教育というものが非常に日本の主流になっていました。でも、蓋を開けてみたら、何か日本に足りないとか、競争力がないうとか、どんどん若いアジアの新しい発想に追い抜かれていく、GDPがどんどん落ちていく、国際競争力を落としていると。このままだとまずいということで、じゃありベラルアーツ、教養なんだと、もっと様々な、頭を使って心を使って、そして答えの無い、解の無いものを考えられる人間を作るんだと、問題解決をできる人間を作るんだという風潮に、上手いことようやく変わってきました。そういう中で本当に教養、リベラルアーツだというときに大切なものの一つが、こういう総合芸術、舞台芸術にいかにつれるか、日常的、そういうことが非常に有効であると思う訳です。
- では、そのリベラルアーツ、良き市民の持つべき教養、倫理観、哲学、そういうものを学ぶということですが、芸術という作品が持っている奥深さですね。作品としての素晴らしさに触れるということ。素晴らしい才能、ギフテッドと言われるような、神様から与えられたような才能を持っている人がいる訳ですね。そういう人を目の当たりにすることで、使っていない脳であるとか心みたいなものが揺り動かされる訳です。

心の柔軟性です。そういうものが様々な社会問題を解決していく人間につながっていく訳ですね。そういう素晴らしい才能を持った人が、これでもかというくらい訓練する訳です。もの凄く厳しい訓練にさらされていくと。これも非常に学びがあるんですね。才能があっても一生懸命努力しなければ、どんどん枯れていってしまう。これだけ才能がある人がこれだけ訓練を重ねて、これだけのものにしてっているというときに、人間の鍛錬というものを見せてくれる訳ですね。そして、舞台芸術というのは総合芸術ですから、チームワークなんです。たった1人が特別に何かをやったとしても、それは評価されない。いかにみんなが多様性の中でそれぞれの相互理解、役割の認識みたいなもの、自分が役割期待に応えるんだという責任感をしっかりと持っていて、はじめて舞台芸術というのは成功する訳ですね。そこから学べるということのは、ごまんとあるんですね。そういうようなものが自分たちの地元にあって、目の前にライブ感を持って勉強できるということは、使い方、生かしようによってはとても有効になってくると。
- 今、横浜は「SDGs 未来都市」に選定されていますよね。いかにサステイナブルであるか。多様性を持って様々な方達を1人も取り残さない都市になっていくんだという中で、心豊かで他人のこ

とを思いやれる、他人の立場になれる、みんなで一つのものをつくり上げていくというんだという感性を持てる。そういうものを市民力として育成していくという意味においては、劇場、そこで行われている総合芸術、その営みみたいなものというのは大変価値が出てくる。有効になってくる。時間がかかるかもしれないけれども、それがじわじわ横浜というものの文化の土壌になって、「横浜ってどういうところ。横浜って何だろう」と聞いたときに、「アートの育成」と市民みんなが誇りを持って言う。そうなってくるとしめたものだ。非常に国際的に「何だ、その横浜というのは」ということで、国際的な価値も持ってくる。そういう世界中のどこを探してもないようなまちづくりというのが、本当に一流のものを集めた、どんどん新しいものを発信していく劇場から生み出すことができるかもしれない。そういう可能性をこの劇場は秘めていると思います。

- ですので、そういうような意識というか、ブランドというか、目指すゴール設定をちゃんものしてはいけません。素晴らしいゴール設定を掲げながらやると。今のコロナの状況で、お金の支出に対して非常に厳しい目が出てくると思います。でも、これだけはみなさん、委員の方も仰っていますが、残念な劇場にしてはいけません。圧倒的な素晴らしい、誰がどう見ても凄い。素人はごまかせても、プロの目は誤魔化せない。プロのダンサー、プロの演者たちが、「是非横浜でやりたい」、「横浜で踊りたい」、「横浜で演奏したい」と、そういう人達、世界は狭いですから口コミでどんどん拡がりますよね。「あそこの劇場はだめだ」、「あそこの劇場は良い」と。プロも惚れ込むような、圧倒的な劇場を作る、中途半端なものを作るんだったらやらないほうが良いという意気込みでやっていって欲しいなと思って私は参加させていただきます。

【高橋部会長】

- 最後にコロナの話が出たので、私もエコノミストなので、コロナということを中心に材料にして考えてみたいと思いますが、8ページで三番目の段落に「コロナウイルスの感染拡大という中での芸術への影響」ということが書いてありますけれども、横浜で劇場を作るといったときに、「なんでこんな時期に」という話がどうしても出てくると思います。それは無理もない話だと思います。足下、経済を中心に大変なマイナスの影響が出て、需要の落ち込み、企業の売上げ、皆さんの仕事が減ると。そういう中で、財政支出で支えていかなくちゃいけないという状況であるのは間違いないと思います。ただ、そうやって当面の財政支出をしたとしても、サービス業を中心に、経済の活力、生産性が落ちてしまうのはある程度避けられない。そして、コロナがどちらかというと、短期で終わらずに2、3年続くということに覚悟しないといけないという状況になっている。
- その場合に政策として何をしなくてはならないかという、一つは今申し上げたように、落ち込んだ売上げや所得を支えるための財政支出も必要ですが、次のステップでは、低下してしまった生産性と

か成長を取り戻すための次の施策が必要になってくると思います。そういう意味で、経済の活力を取り戻し、活性化につなげるような施策というのが次のステップで一つ必要になってくる。

- 結論的に申し上げると、劇場を作るという話は、次のステップに、もう1回日本を活性化させていくということにつながる大事な施策ではないかと感じております。コロナ自体の経済への影響というのが一過性ではなくて、回復まで時間がかかるということですが、同時にコロナを通じて大きな構造変化が起きるだろうとも言われております。
- 例えば、ソーシャルディスタンスということが言われる中で、いわゆるデジタル化ですね。ITだとかそういったものを使ったデジタル化が非常に加速するだろうといったことが言われています。
- 2つ目に、世界がグローバリゼーションから少し逆行してしまうかもしれないと言われております。例えば、人、物の動きが鈍化する。あるいは、米中の対立がより激化してくるだろうということで、ブロック化さえも懸念されるという状況になってきています。
- 3つ目に、先ほど話がありましたけれども、こういう状況の中でコミュニティの在り方、あるいは、社会的な包摂というものが改めて問われるようになってきています。アメリカや世界の差別の問題とかが表面化しているのも、そういうことと関係があると思います。
- そういう変化が起きていく中で、放っておきますと世界がグローバル化から逆行してしまうため、日本が生き残るためには国内だけを見てはいけませんので、例えばインバウンドの復活、人・物を改めて日本に呼び込んでくるということについて積極的な施策を取らなくてはならないと思います。そういう中で考えたときに、国際的に評価されるような劇場を作っていくことのメリットが改めて出てくるのではないかと思います。
- 米中の分断が進んでいく中で、日本は、中国とも対立しなくちゃいけないかもしれない。だけど、そのときにアジアという目線で見ると、日本が開かれた価値をアジアに提供していく、「米中の縮み思考に負けないぞ」ということが必要になってくる。そういう意味で、横浜からその価値を発信することで、アジアというものを視野に置きながら、人を呼び込む価値を提供していくということが今まで以上に重要になってくると。
- もう一つは、コミュニティの中では人間の役割、思い、幸せというものがより重要になってきますから、そういう中で色々話が出た芸術の価値、こういったところも非常に重要になってくるのではないかと思います。ですから、コロナによって足下は確かに財政的に大変ですが、より長い目で見ると、地域の活力・活性化という観点から政策を考えることも重要だと思います。そうは言っても、コロナの時代に横浜市財政にそれなりに影響が出るとは思いますので、当然、劇場を作っていく上で、先ほど運営費の話も出しましたが、市の体力から見て妥当なのかというチェックは今まで以上に厳しくやらなければならないと思います。

- さて、9ページまでのところでお伺いしましたがけれども、13ページ以降、具体的に論点ということで挙げていただいております。ここについては今後、管理運営検討部会で具体的に、これから議論していく訳ですがけれども、今日の時点でこの論点に対して何か付け加えるところなり、御質問なりがあればお伺いしたいと思います。先ほどお話も出ておりますけれども、それ以外に何か、論点や視点で御意見、御質問があればお伺いしたいと思います。

【藤野委員】

- 各論のところも色々と考えたことあるので、次回以降色々お話しさせていただきたいと思うんですがけれども、今、ひと回りして皆さんの御意見を聞いて、非常に心強く思いました。内田委員がお話しになられたことというのは、芸術文化の持っているクリエイティビティの本質から入られていますよね。人づくりにとって芸術文化は、なくてはならない、非常に重要な時代に増々なっていくだろうと。そこから発展して社会が作られ、連帯感が作られていくし、まちづくりになる。それは最終的には経済に結びついていく、そういう循環ですよ。
- 最初から「経済のために」という道具主義的な原則から行くと大体失敗していると、世界中を見て分かっているので、かなり長期的に取り組まなければならない。びわ湖ホールでも20年かかるんですよ。結果が出るまで。そうすると、短期的な目標値を設定するというよりも、理想を掲げてそこに行き着くように、理論武装をしていく。それから、舞台芸術の力について実感を持ってもらう、両方必要だと思います。それから、高橋委員長が言われた国際情勢を考えたときに、本当に増々芸術文化の国境を超える力というのは重要になっていくということをこの間、非常に痛感しています。
- こういう事態になる前も、僕は一つ、いつも思い描いていたことがあって、学生にもその話をするんですがけれども、バレンボイムという音楽家がありますね。指揮者・ピアニスト。エドワード・サイードという思想家がいます。この2人が20年ぐらい前にオーケストラを作りました。有名な話なんですけども、ウェスト＝イースタン・ディヴァンオーケストラという、ゲーテの『西東詩集』の名前を使ったオーケストラ。これはパレスチナ紛争が猖獗（しょうけつ）を極めていて、そのパレスチナの問題を、どうにかしてオーケストラを作ることによって解決したいというのが2人の思いでした。
- バレンボイムはユダヤ系、サイードはパレスチナ系だったんですが、この2人が結束してオーケストラを作りました。いつも思うのは、このパレスチナとイスラエルの子供たち、睨み合っている訳ですね。子供の頃から敵として相手を見る。子供の頃から銃を持たされて教育をしてる訳ですね。そのパレスチナやイスラエルの子供達が銃を持って大きくなるのではなくて、銃をもしフルートに変えてみたら、どんな素晴らしい世界が生まれるか。それがバイオリンだったらどんなに素晴らしい世

界が生まれるのか。そのための投資って大したことないんですね。軍事費から見たら。なんでそこに世界の指導者は気が付かないのかということ、バレンボイムやサイドの試みからずっと考えてきました。

- コロナの問題が出てきて、今、一番憂慮するのは、高橋先生が言われたような米中関係、その中で日本がどういうスタンスを取っていくか。やはり今こそ日本でしか生まれない新しい価値を、特に横浜から発信する必要があると思います。アメリカを見ても、国内に分断と格差がどんどん広がって行って、このままでは正常なシステムが立ち行かなくなる。その内部の矛盾を外部に、外敵に転化するという事が起きています。白人ナショナリズムということが言われている訳だけれども、こういったことでまた防衛予算とか軍事予算が増えていくというのはどうしても避けなくちゃいけないことだと思います。
- 2、3日前にトランプ大統領が、NATO軍の目標値と比べてドイツを批判しました。NATOの加盟国はGDPの2パーセントを国防費に使えっていう目標があるんです。ところがドイツは1.2パーセントなんです。それでトランプ大統領は怒って、ドイツからアメリカ兵を3分の1撤退させるということを言い出したんですね。アメリカはもちろんGDPも大きいですし、3.1パーセント、80兆円が軍事費になっています。
- ドイツは1.2パーセント、国防費が5兆円。日本が5.4兆円で大体同じぐらいなんですね。ドイツの文化予算がいくらかっていうと、国のレベルと自治体のレベルを全部足すと1兆3,000億円です。国防費が5兆円です。さっきお話ししたように、ドイツは1.3兆円を芸術文化に公的予算として費やすことによって、社会的な安定とか信頼感とか連帯感が生まれて、分断を避けられているという、凄く大きな社会的効果をもたらしていると思うんです。
- 銃や軍事力で分断させるのではなくて、芸術によって融和させる。秩序を自分たちから作っていこうという気運を起こさせる。この点で芸術文化の振興と国際交流は、安全保障にとっても非常に重要だということがわかります。一言で言えば、芸術文化によるグローバルな安全保障ということが、これから増々必要になってくるだろうということです。
- ドイツは1.3兆円を公的文化予算に費やしているのですが、いわゆる文化GDPがどれだけあるかということですね。芸術産業を含めて、その文化GDPがなんと13兆円です。つまり、丁度10倍のはね返しなんですね。1.3兆円の投資にたいして、10倍の文化GDPが生まれている訳です。ドイツというと自動車産業が一番有名ですけど、自動車産業は大体20兆円です。20兆円に対して13兆円の文化GDPをドイツは上げている。これもやはり日本がこれから目指すべき姿でしょう。
- 1.3兆円の公的文化予算、これが高いかどうかというのはなかなか難しい。でも、日本の文化庁予算は2000年から全然変わってなくて、おいくらかご存じですよ。日本の文化庁予算は1,000億円で

す。ドイツは1.3兆円で13兆円の文化GDP、日本の文化庁予算は1000億円からオリンピックがあると言いながら全然変わらない。この貧しさをよく考えて欲しい。

- ・ 軍事予算は5.4兆円で増えてます。その部分を減らせてというのは、なかなか難しいかもしれないけど、文化予算を軍事予算の3分の1とか2分の1まで持っていったら、世界の平和、安定に大きく貢献することは、普通、理性を持っている人だったら分かると思います。メルケル首相はそういうことを考えています。感覚、感性の衰えた人は理性的な判断もできなくなります。芸術文化が平和構築の近道であるという自明のことが分からないんですね。だから、今、残念ながら世界の指導者は、歴史から何も学んでないと思っています。今こそ芸術文化から世界の指導者は学んでもらいたい。話が飛躍しましたが、その意味でも今回こういう劇場を横浜で作って、新しい価値観を世界に発信するというのは非常に重要な、時宜を得た仕事じゃないか、ミッションじゃないかなと思います。

【山中委員】

- ・ コロナのことがありますけど、長い目で見れば皆さんがおっしゃるように、劇場は経済活性化の中核になるということなんですけど、うちなんかでもお客様のアンケートで「びわ湖ホールがあるので、近くにマンションを買いました」というような回答がちらほら見られる。本当はそのマンションの建設業者とかに見せて、頂けるものがあったら支援を頂きたいと思っているんですけど。それはまだできてないんですけど。
- ・ 何年かやってきていると、皆さん評価してくださるところがあるんじゃないかなと思っています。それと、お近くに住んでおられる方々で、全然びわ湖ホールに来たことがないという方も何名かボランティアとしてホールの周りの植栽とか掃除とかしてくださっています。公演は見たことないけれども、お客様を綺麗に迎えたいという意識を持っている方も多く、まあ一緒に掃除なんかしてるんですけど。そういうふうに変わってくるものだというふうに思います。

【高橋部会長】

- ・ 内田委員から「ゴールセッティングが大事だ」という話があって、4章のところ「目標の姿」というのがあって、これが一種ゴールだと思いますけれど、足りないのはやっぱり時間軸かなと思いました。これが短期的に何か具体的な案を策定してやる話ではなくて、そういう部分が無いではないかもしれませんが、より中長期的に劇場を作ることの効果、あるいは、目指すものというのを持った上でやっていくプロジェクトだと思いますので、これが時間軸で見たときにどうなっていくのかというのが大事だと思います。特に、ソフトファーストも含めて、ゴールに向かってどういうふうにハード、ソフト両面で動かしていくのか。あるいは、成果を何で見えていくのかということが、それぞれの

ステージで多分問われているのだと思います。そういうこと等を、具体論を議論する際に、念頭に置いてもらわないといけないということを感じました。

【内田委員】

- ・ 「高次のオペラ、バレエを上演できる一流の劇場だ」という言葉の中で、今は共有してるんですけど、具体的にどう目指すのかという共有というのですかね。どう横浜の劇場というブランドを構築していくのか、今まだ皆さんの思いの中で「こんなのかな」という感じになっていると思うんですよ。そのイメージ、どうブランディングしていくのかとか、本当に、パリ・オペラ座と肩を並べるようなところを目指していくということなのか。それならば「こういう設えである」とか、「こういうものが絶対的に必要だよ」というようなことも出てくると思うので、しっかりと中途半端なものにならないように。もちろんお金のことも大事ですけども、一流のものを作っていくということで。最後、「なんか残念な劇場になっちゃったよね」というのありがちじゃないですか。なんとなく骨抜きになっちゃって。最初は理想が高くて、良いものを作ろうとみんなで頑張って話し合っ、最後の最後で「こんなになっちゃったんだよね」ということにならないように、しっかりとブランドイメージみたいなものをみんなできちっと共有しながらそれを議論して実現していただけたらなと思います。

【高橋部会長】

- ・ ブランドイメージって最初からあるのではなく、作るものですよね。そう考えると、新しい劇場というのが、単に横浜だけのものではなくて、日本として誇れるものにしていく。従ってある意味では、国家プロジェクトというようにも位置付けられると。そういう意味で国、新国立、民間企業も含めて、どういう連携をしていくのかという設計が凄く大事で、国にも是非関わっていただきたいということなので、これから追々、事務局がどういうことを考えてるのか説明していただきたいと思います。
- ・ 13ページで、プログラムのお話で、今回、バレエが主体でオペラ、それからオーケストラその他舞台とありますが、先ほど新分野とか新しい領域という話がありました。この辺も固定観念に捉われないで、色んなものが複合した新しい舞台芸術が創作されるような劇場というのはどういうものかというのを、専門家、部会にお2人いらっしゃいますけれども、そういった視点も含めて考えていく必要があります。当面は確かにバレエもしれませんが、長期的に見たときに、新しいものが生まれてくるような劇場というのが必要だと思うので、そのためのセッティングと言いますか、仕組づくりというものが必要だと思います。その辺もまた論点の中で議論させていただけたらと思っています。

- ・ 次回以降は、4章にある「論点」をより掘り下げて具体的に議論していきますので、またよろしくお願ひします。
- ・ まとめをさせていただきますと、今回は検討委員会から提起された意見と、それに対する対応方針案が示され、皆様から様々な御意見をいただきました。第1回目に素晴らしい哲学と申しますか、その議論ができたのではないかなと思います。とても重要な議論だったと思います。ここで次回に向けた本日の取りまとめをして、私から4点を確認させていただきたいと思います。
- ・ 1つ目は、総括意見を踏まえた2つの対応方針案について、本部会で内容を了解したこと、その上で事務局を通じて基本計画検討部会へ共有することについてお話ししたいと思います。部会を2つに分けていますので、それぞれがバラバラに議論しても全く意味ないと思うので、そこは事務局に是非とも、両方の議論が逐一、委員の方に伝わるようお願いしたいと思います。
- ・ 2つ目ですけれども、次回以降、上演プログラムの考え方、次世代育成、育成機能の強化など、具体的な検討作業に入っていきますので、国内外の他の劇場なども参考にしつつ議論を進めていくことが非常に重要だと思います。育成機能は日本で今まであまり例がないことでもありますので、事務局において是非とも研究を進めておいていただきたい。恐らく劇場そのものが出来上がる前から育成をスタートしなければならない訳ですから、そういう意味でも非常に先行研究が必要だと思います。
- ・ 3つ目ですけれども、新国立劇場等の分担、あるいは、連携等にも触れましたけれども、今後、国との調整状況を踏まえながら議論を進めていくことが必要だと思います。逐次、情報提供いただきたいと思ひます。
- ・ 4つ目は、内田委員からも提起のあったブランディングについて。横浜の劇場を国の劇場としてブランディングをしていく。そのときにどういうことが必要なのかということ議論しなければならぬと思ひます。
- ・ 以上を私からの今日の取りまとめとさせていただきますと思ひますけれども、委員の皆さん、いかがでしょうか。

【委員】

(異論なし)

【高橋部会長】

- ・ 最後に私からお願ひがござひます。これから色々検討を深めていく上で、委員の皆様には是非とも議論の参考になるような資料があれば、あらかじめ事務局に提供をお願いしたいと思います。それを受

けて、事務局が加工してまた示していただくことになるかと思しますので、是非ともよろしくお願
い
します。